

令和元年6月13日現在

機関番号：11501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16799

研究課題名（和文）文芸誌から見るフランス象徴派の集団性に関する研究 グールモンとジャリを起点に

研究課題名（英文）Research on the Collectivity of the Symbolist Journals in France with a focus on Gourmont and Jarry

研究代表者

合田 陽祐 (GODA, YOSUKE)

山形大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：20726814

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀末フランスに起こった文芸運動である象徴主義を、このグループに属した作家たちが創刊した文芸誌との関係から再検討した。この研究ではおもに、世紀末の多くの作家や画家がコラボレーションをした『メルキュール・ド・フランス』を分析対象とした。論文や発表では、文学作品のみならず、小劇場や前衛絵画のグループについても検討し、雑誌グループによる共同制作や集団表象の詳細を明らかにした。象徴主義の風景を議題とするシンポジウムにも参加し、共著論文のかたちで成果を公表することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでわが国では、19世紀末の象徴主義は、おもに作家論の枠組みから検討されていた。本研究の学術的意義は、象徴派の実践を、新たに集団性の概念から読みといた点にある。象徴派の作家が創刊した雑誌に注目することで、この時代の文芸に、グループや集団表象の問題が顕在していることを、論文や発表を通じて明らかにした。とくに1890年代の群小作家たちは、文芸誌内の力関係やそこで共有された美学を検討することで、その存在意義を多角的に理解することができるのである。本研究の社会的意義は、フランス19世紀末の文芸を、雑誌文化との関係から考察することで、新しい文化史の一側面を紹介することができた点にある。

研究成果の概要（英文）：This study has reconsidered the symbolism, literary and artistic movement of the late nineteenth century in France, in terms of its relationship to the literary magazines published by the Symbolist group. This research mainly focuses on *Mercure de France*, which collaborated with many artists and painters at the end of the century. In the published papers and conferences, not only literary works but also small theaters and the avant-garde painting groups were examined. The details of collaborative productions in the symbolist journals and its representations of collectivity were clarified. The author participated in a symposium on the subject of symbolism and landscape, and the results were published in the form of a co-authored paper.

研究分野：フランス19世紀末文学

キーワード：象徴主義 デカダン派 文芸誌 集団表象 共同制作 前衛画家 小劇場 世紀末

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 報告者はこれまで、フランス 19 世紀末の作家アルフレッド・ジャリ (1873-1907) を研究してきた。そのジャリが、象徴派の文芸誌と深く関わっていたことから、文芸誌との関係から象徴主義のグループ研究を開始することを着想した。幸いフランスにおいても、この分野の研究は昨今活性化しつつあり、それらの成果を参照しつつ独自の検討を進めることとした。

(2) とはいえわが国では上述の分野に関する研究が乏しいため、まずはその導入や見取り図を示すような論文を作成する必要がある。そこで 19 世紀末にもっとも重要な文芸誌であった『メルキュール・ド・フランス』誌周辺に設定し、とくにレミ・ド・グールモンとジャリのグループに分析の対象を絞ることとした。

2. 研究の目的

(1) わが国の象徴派研究は、ボードレールやマラルメ、ヴァレリーやクローデルなどをおもな対象として、作家論の枠組みから行われてきた。これらの作家研究は、単行本を軸に据えた分析を前提としている。だが、世紀末に活躍した作家の多くは同時に、雑誌に記事を頻繁に寄稿する文芸ジャーナリストでもあった。たとえばジャリは、詩人であると同時に雑誌のコラムニストであり、編集者であり、小劇場の秘書兼宣伝担当でもあった。本研究では、雑誌をおもたる分析の対象に設定することで、従来のメジャー作家/マイナー作家の二分法を乗り越えることを目指した。具体的には、文壇における作家たちのネットワークや、群小作家のグループの歴史的価値の解明を、より普遍的な立場から実施することを目指した。

(2) これまでの世紀末の雑誌を扱った研究は、作家研究の補助的な位置づけに甘んじてきた。すなわち、単行本未収録のテキストを雑誌から発掘し、それをもって全集の編集作業の補完を行ってきたのである。これに対し、19 世紀末の文学場における雑誌そのものの役割を問うことで、象徴主義の複数性がいかなるものであったかを提示することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 以上の目的に沿って研究を進めるために、社会学的な方法論を部分的に採用した。それはこの学問が、作家や雑誌が目指した文壇における理想的な位置取りや、戦略的な価値を分析するのに適した言説を有しているからである。

(2) 本研究ではとくに世紀末の小集団に注目することとした。マラルメの火曜会のような比較的有名なグループや、『白色評論』のような大きな文芸誌グループ以外にも、重要な集団は複数存在したからである。当時の前衛画家たちと協力した美術雑誌や、前衛小劇場や、作品内でのグループ表象に焦点を当てることで、単発論文の形でまとめる方法を採用した。

4. 研究成果

(1) 研究成果は、大きく 4 つの方向性にまとめることができた。1 つ目として、象徴主義におけるフィクションと現実の関係の考察をとおして、雑誌に発表された時事批評のエクリチュールの特徴を明らかにした。こうしたフィクションの言説の検討は、最終年度における小説における語りの研究にもつながっていった。

(2) 2 つ目として、外部ないし深部からやってくる〈声〉を、どのように創作に活用するかについて検討を行った。これは依頼の共著論文であったため、本研究の中心課題とは方向性が異なるが、マラルメ的な脱人称化の問題と、ジャリの脱人称化の問題を比較するなど、本課題に沿う形で、19 世紀末のコンテクストを踏まえたいうでの分析も行った。

(3) 3 つ目は、小集団の生き残り戦術についての研究である。高名な前衛劇場とは異なり、基本的には友愛で結びついた群小芸術家たちの小集団は、比較的マイナーといえる活動を定期的に続けるうえで、文壇のネットワークを利用する必要があった。文芸誌の支援を受けたり、異なるグループとの共同作業を試みたりと、さまざまな失敗と挫折を繰り返しながら、19 世紀末の新たなボヘミアンとして芸術活動を継続していったのである。

(4) 最後に、雑誌から書物へのテキスト生成に関する検討を行った。世紀末の美学として、マラルメの「書物」はとりわけ有名であるが、他の象徴派の作家にはそうした特定の書物概念は存在しなかったのか。この疑問を出発点に、雑誌に発表したテキストを、単行本に再録するさいに、作家がどのような処理を行っているのかを検討した。これにより雑誌を創作の最初の媒体とする、極めて象徴主義的な本づくりの過程を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

(1) おおよそ上記の 4 つに沿って、公にした論文と発表の内容を詳しく述べる。フィクションの言説との関係では、ジャリが『白色評論』等に発表した時事批評を再検討し、その基本原則についてまとめた。通常、象徴派の作品は、現実からは乖離した幻想や夢の世界を表象したものが多くいとされる。これに対して、ジャリは自らのテキストにおいて、新聞の三面記事の書き換えを行っている。このようにジャリが、定期刊行物の言説を媒介として、現実の変形を行っていたことを、既発表の論文よりも明示的に示した(下記業績 5)。こうした現実の変形は、小説においては、風景を対象としても行われている。現実の対象を知覚するさいに、さまざまな外的な刺激や圧力を加えることで、そのイメージを歪ませて表象するのである(下記業績 13)。このフィクションの構築は、ジャリの後期の作品では、物語の提示の仕方にも関わってくる。

物語に複数の視点人物を設定することで、現実の継起する時間的な流れから作品を解放しようとする詩学が、小説『超男性』の中心的な課題であったことを明らかにした(下記業績6)。

(2) <声>の借用ないし引用にまつわる戦略を論じた論文では(下記業績12)、世紀末の雑誌でも頻りに紹介されていたオカルト哲学やイギリスの物理学者の言説を、ジャリがどの部分に注目して換骨奪胎しているかを明らかにした。

(3) 当時の前衛劇場であった制作座が、『メルキュール・ド・フランス』のグループと決裂した後に結成された集団である「操り人形座」は、ジャリや画家のポナールが在籍したことで知られる。このグループは『白色評論』と関りのあったナビ派の画家たちの協力を得たが、絶えず財政難に苦しんだ。彼らがどのように自らの活動を宣伝し、資金調達を行ったのか、当時の資料を示しながら、その戦略を明らかにした(下記業績7)。ポナールについては個別に発表も行った(下記業績11)。ポナールはナビ派のメンバーであり、象徴主義の画家として重要な位置にあった。この発表では、ポナールの知覚理論が、鑑賞者の視線の誘導を行うために機能していることを明らかにした。とりわけナビ派の画家たちが好んで用いた「白」を、ポナールが効果的に利用していることを作品の構図分析を通じて示した。

(4) 雑誌から書物へのテキスト生成について論じた発表(下記業績10)については、現在、共著論文の出版に向けて論攷の執筆作業を行っているため、上記の概要を示すにとどめる。

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1. 合田陽祐「アルフレッド・ジャリの『超男性』再読 語りの観点から」、『研究年報』、山形大学人文社会科学部、査読有、第16号、pp. 61-79、2019年2月。
2. 合田陽祐「パタフィジックとフィクション フィクションを構築する語りについて」、『Nord-Est』、日本フランス語フランス文学会東北支部、査読無、第10号、pp. 47-52、2017年5月。
3. 合田陽祐「対訳で楽しむ アルフレッド・ジャリ『超男性』」全6回、『ふらんす』、白水社、各号4ページ担当、査読無、2016年9月~2017年2月。
4. 合田陽祐「『イマジエ』とジャリの美術批評の方法について」、『EBOOK』、神戸大学仏語仏文学研究会、査読有、第28号、pp. 61-79、2016年5月。
5. 合田陽祐「1890年代の「小雑誌」グループについて」、『Nord-Est』、日本フランス語フランス文学会東北支部、査読無、第9号、pp. 2-7、2016年5月。
6. 合田陽祐「編集者としてのジャリとゲールモン 前衛版画雑誌『イマジエ』について」、『Nord-Est』、日本フランス語フランス文学会東北支部、査読無、第9号、pp. 20-25、2016年5月。

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 合田陽祐「ポナールと「見させる」絵画 象徴主義の時代を中心に」、ワークショップ「ポナールの絵画をめぐる冒険」(表象文化論学会パネル企画)、於山形大学小白川キャンパス、2018年11月10日
2. 合田陽祐「カルチエ・ラタンからモンマルトルへ ジャリから見る1890年代パリの文学場」、「マラルメ・シンポジウム2018」(代表:中畑寛之氏・大出敦氏)於慶應義塾大学日吉キャンパス、2018年9月8日
3. 合田陽祐「ジャリにおける象徴主義的風景について」、「象徴主義と 風景」(連続シンポジウム「象徴主義」第一回。代表:坂巻康司氏)、於東北大学川内キャンパス、2017年9月30日
4. 合田陽祐「パタフィジックとフィクション」日本フランス語フランス文学会東北支部大会、シンポジウム「フィクション化する世界」(宮腰直人氏、摂津隆信氏、柿並良佑氏と)、於山形大学小白川キャンパス、2016年11月26日
5. 合田陽祐「世紀末の小集団と共同制作 「操り人形座」の戦略とその意義」、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会、ワークショップ「文学集団の詩学」(熊谷謙介氏、倉方健作氏、福田裕大氏と)、於東北大学川内キャンパス、2016年10月23日

〔図書〕(計 2 件)

1. 合田陽祐他(共著)「ジャリと風景の再構築 『昼と夜』における知覚と表象の関係を中心に」、『象徴主義と 風景 ボードレールからブルーストまで』収録、坂巻康司ほか(編)、水声社、pp. 298-325、2018年10月(ISBN:978-4-8010-0375-0)(ISBN:978-4-582-33327-5)
2. 合田陽祐他(共著)「操る声 と 声の借用 ジャリにおける蓄音機、催眠術、テレパシー」、『声と文学 拡張する身体の誘惑』収録、塚本昌則・鈴木雅雄(編)、平凡社、pp. 103-120、2017年3月

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称:

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）:

(2)研究協力者

研究協力者氏名：ジュリアン・シュー
ローマ字氏名：Julien Schuh

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。